

新年おめでとうございます !!



◇ 3学期が無事スタートしました。例年に比べ短い冬休みでしたが、子どもたちは元気に3学期をスタートさせることができましたでしょうか。このコロナ禍で子どもたちはもちろん、その家族そして先生方もみな何らかのストレスを感じ、すっきりできない毎日を過ごされているのではないかと思います。それでも新しい年の初めにあたり、夢や希望を語り合い、笑顔で過ごせるよう励ましていきたいものです。学校が子どもたちにとって心安らぐ場になることを願っています。

◇ 3学期はあっという間に過ぎてしまいます。今年度のまとめをする学期です。昨年のコロナ禍による休校措置などを思い起こすと、なおさらのこと、注意しなくてはいけないのが授業の進度です。やり残すことがないように先を見通し、計画的に進めるよう心掛けてください。中学校においては進路決定にかかわる大切な時期でもあります。コロナ禍の収束はまだまだ先のことのように思われます。子どもたちとともに先生方も体調管理に十分ご配慮ください。

◇各学校では教育課程編成作業が進んでいると思いますが、中学校は、令和3年4月から新学習指導要領が完全実施となります。新学習指導要領のねらいや内容に即し、自校の特色を生かした教育課程を編成することはもちろんですが、昨年のコロナ禍での経験も生かし、これまでの教育活動を見直す機会にしたいものです。<無駄だと思っていたことが実はとても重要だった。><オンラインで便利になったが奪われたものはどうする？>学んだことはたくさんあるはずです。

良識あるサッカー観戦 ～新聞記事から～

お正月1月4日に行われたサッカー、ルヴァン杯決勝の結果を報じた記事から日本の教育のすばらしさを感じることができました。

欧州などの各国リーグでは無観客試合が続いているそうですが、日本では収容率50%とはいえ観客を迎え入れています。これは世界的にも珍しいことだそうです。前後左右の1席ずつを空けた応援席。試合前の「観戦マナー」のアナウンス。抑制のきいた歓声。そして観客が作り出す、声を出さず変化をつけた手拍子や拍手。「ファンの良識を信頼」して作成したというガイドライン。その信頼を裏切らないファンの行動。これらの信頼関係を作り上げる心を育て、育んできたのが日本の教育なのです。

家庭内で飛沫対策を

感染症がはやりやすい冬。家族が発熱したらどうすればいいのか。家で感染を広げないためにできることは？

- 感染を疑われる人とは、室内を仕切るなどできるだけ部屋を分ける。個室に隔離するのが理想だが、ビニールシートで区切るだけでも直接の飛沫を防ぐことができる。換気と合わせて効果が得られる。
- 世話をする人は一人が望ましい。
- 日中は、できるだけ換気を。(エアコンをつける、換気扇を回す、窓を開ける。)
- こまめにみんなで手を石鹸で洗う。もしくはアルコール消毒をする。
- 共用部分(ドアの取っ手やノブ、蛇口など)を薄めた漂白剤で拭く。その後、水やアルコールで拭く。
- 汚れた衣服やリネンを洗濯する時は、手袋やマスクを使う。
- 鼻をかんだティッシュなどのごみはすぐに袋に入れ、密閉して捨てる。

関西福祉大 勝田吉彰教授

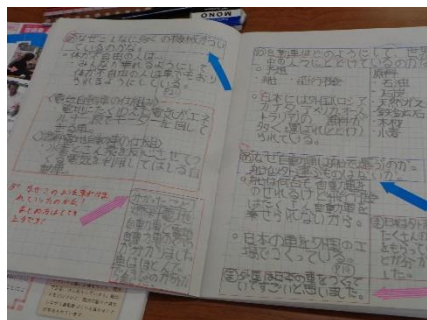


ジャンプアップ研修から

教職経験が5年前後の若い先生方を対象にした須賀川市独自のジャンプアップ研修(希望者)がコロナ禍にも負けず積極的に進められています。授業研究は義務、というより権利です。コロナ禍を理由に授業研究を後退させてはいけません。試行錯誤を繰り返しながらも、子どもたちと向き合う姿を紹介します。

◇ A 小学校 B 先生の実践 (社会科の授業から)

B先生の今年度のテーマは、昨年の反省から「ノート指導」と「グループ学習」の2点でした。



学びの足跡が見えて、自分の考えや感想が残るノート作り

- ⇒一人一人の学びの型が見えてきて、個人差に応じた資料の必要性に気づくことができた。準備の参考になるとともに評価の手立てになった。
- ⇒課題の重要性を痛感。さらに自分の板書の量や内容が子どもたちの学びのブレーキにならないかを考えるようになった。
- ⇒ノート作りのルールが身につくと、自主的に予習に取り組む子どもが出てきた。

性格や学力などの違いを理解し合いながら、うんうんとうなずき合いながら聴き合えるグループ学習

- ⇒これまでと違った子ども同士の関係性が見えてきた。子どもたちは私的なつながりに左右されずに学び合っていた。児童理解がぐんと深まった。
- ⇒算数科の授業でいい活動ができたと思ったら社会科では機能しないグループ構成だった。教科ごとにメンバーを変更してみた。すると、子どもたちの中に柔軟性が生まれ一人一人が生き生きとしてきた。
- ⇒活動目的を伝え、子どもたちの学びを見守ること。簡単そうで難しい。



※上記の2点に重点を置いてのスタートでしたが進めるうちに一人一人の

子どもの理解が深まってきました。学級担任として大切な資質の一つである「子どもに寄り添う」ための「児童理解」。その積み重ねを繰り返し、信頼関係が築かれていくのだと思います。B先生は今、地域の方や卒業生の力を借りて教材開発に取り組んでいます。子どもたちの目も輝いてきました。

◇ C 小学校の D 先生の実践から



賑やかな子どもたちの視線を一つにまとめ、集中させるにはどうすればよいか。

- 取り組み①机の配置をコの字型にする。
- ②板書の工夫と視覚的にとらえる教材や教具作り
- ③タブレットや拡大機などの活用

コの字型の机配置にすると次第に離席する子がなくなり、子ども「はいはいはい。」が少なくなった。③の効果は大きかった。子ども

たちは自分の学ぶ姿を見せつけられるとともに友達の姿を映像を通して見る。視線が集中することで課題を共有することができてきた。D先生は②③をどのタイミングで使っていくか試行錯誤中。

※教材や教具、そしてタブレット・・・いろいろ試していくということは、それに見合った教材研究がなされているということ。子どもたちの顔を思い浮かべながらの教材研究です。授業は生き物です。教職2年目のD先生は、無我夢中の昨年の経験を生かし一つ一つ地道に取り組んでいます。先輩方の話に耳を傾けて素直にアドバイスに応じています。その熱意は子どもたちにもしっかり伝わっています。